

教育相談の考え方に根ざした授業の充実を目指して

学校教育相談研究会議

高橋 由紀¹

河野 利智²

増田 功³

井上 麻里子⁴

要 約

学級の子どもたちが学び合う授業の成立には、学級内の子ども相互に尊重し合える人間関係が必要である。しかし、多様な価値観の中で育ってきている子どもたちや、友達との関係が上手くつけない子どもたちが多く見られる今日においては、学び合いの授業を成立させる手立ての一つとして、教師と子どもの関係や子どもたちの人間関係の促進に教師が積極的にかかわっていく必要があると考える。

そこで、信頼し合い安心できる人間関係を築くために、子ども一人一人の思いを理解し生かすかわりとはどのようなかわりであるのか。そして、それが学級集団にどう影響し学び合いの授業につながっていくのか、教育相談の考え方を基盤に据え、授業リフレクションや参加観察を取り入れた授業分析から探ることとした。

その結果、一人一人の子どもの思いに気付き、その子どもの存在価値を認め、成長を支えていこうとする教師の姿勢が徐々に適切なかわりに近づき、その積み重ねにより教師と子どもの信頼関係が築かれていくのが実感された。また教師の積極的なかわりによって子どもたちの人間関係が促進されていき安心感の在る学級集団がつくられていくことが観察された。そこでは学びへの意欲が高まり、共に学ぶことの意義を見だし、学び合おうとする子どもたちの姿が見られた。子どもを肯定的に理解しようとする教師の姿勢は学び合いの授業を支えるものであった。

キーワード：教育相談の考え方、信頼関係、安心感、学び合い、参加観察、授業リフレクション

目 次

主題設定の理由	218	(1)実践授業	222
研究のねらい	218	(2)授業の振り返り	222
研究の内容および方法	218	第1回実践授業	222
1 研究の内容	218	Q - U学級満足度尺度実施	224
(1)「教育相談の考え方」を基盤にした		第2回実践授業	225
教師のかかわりを探る	218	第3回実践授業	227
(2)「授業の充実を目指す」ために	219	第4回実践授業	230
2 研究方法	220	研究のまとめ	230
(1)子どもの学びの内面を読むために	220	1 研究から見えてきたこと	230
(2)教師の新たな気付きのために	221	2 今後の課題	231
(3)子どもの内面理解と学級の状態の		参考文献	232
把握のために	221	指導助言者	232
3 研究の実践	222		

¹川崎市立有馬小学校教諭（長期研修員）

²川崎市立平間中学校教諭（研修員）

³川崎市立渡田中学校教諭（研修員）

⁴川崎市立平小学校教諭（研修員）

主題設定の理由

授業が知識や技術の習得と同時に、教師や友達との人間関係を築く力を育て、その人間関係を通して自己の確立を促していく場であるということを意識している教師はいつも、子どもたちの成長を願って、「楽しかった」「分かった」と感じられる授業が創り出せるように取り組んでいる。(図1)

しかし、実際には授業が教師の一方的な教え込みになっていたり、限られた子どもたちとのやりとりだけになっていたり、高まりを感じられない授業になっていることも多い。その原因として、教師と子どもとの関係がしっくりいかなかったり、学級が安心して自分の意見が言えない雰囲気があったりと、教師の子ども理解の足りなさや学級での子どもたちの人間関係の希薄などが考えられる。授業の質は教師と子どもや子どもたちの人間関係の在り方に大きく影響されるからである。

そこで本研究会議では、教育相談の考え方を基盤に据え、教師の子ども理解や学級における子どもたちの人間関係の視点から、授業をどのようにして充実させていくのかを検討していきたいと考え、本主題を設定した。

また教師の子ども理解や子どもの自己理解に基づいた楽しい授業、分かる授業をつくりだすことで、学級が穏やかな雰囲気になり、不登校やいじめ、学級崩壊などの今日的諸問題の解決にも好影響を及ぼすのではないかと思われる。

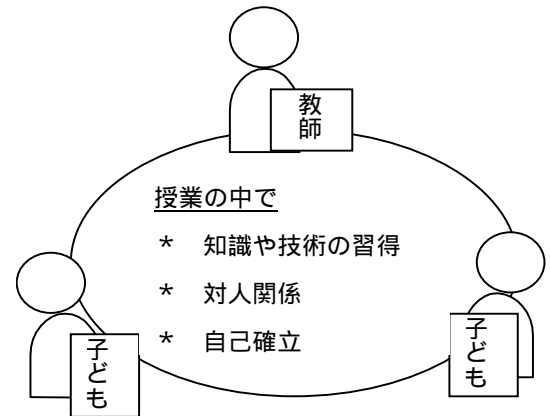


図1 充実した授業

研究のねらい

学級の子子どもたちが学び合い、響き合うような授業の成立には、何でも言い合える学級の雰囲気や友達の考えを聞こうとする態度、様々な場面で互いに協力し支え合おうとするなど、学級内の子子ども相互に尊重し合える人間関係の成立が必要である。しかしながら、多様な価値観の中で育ってきている子どもや友達との関係が上手くつukれない子どもが多く見られる今日においては、学び合い、響き合う授業を成立させる手立ての一つとして教師と子どもの関係や、子どもたちの人間関係の促進に教師が積極的にかかわっていく必要があると考える。

そこで、本研究会議では、信頼し合い安心できる人間関係を築くために、子ども一人一人の思いを理解し生かすかわりとは、どのようなかわりであるのか。そしてそれが学級集団にどう影響し、学び合いの授業にどうつながっていくのかを探ることにした。

研究の内容および方法

1 研究の内容

(1)「教育相談の考え方」を基盤にした教師のかかわりを探る

子どもは様々な思いを抱き、それぞれに自己表現をしながら学習に取り組んでいる。教師は、子ども

もたちが今何を感じ、どう考えているのか、他者の考えをどう受け止め、理解しようとしているのかなど、その瞬間に起きていることを見取り、判断しながら授業を進めている。その時に示す教師の言動が、子どもの次の言動へと影響を及ぼす。更にその後子ども様子を見取り、判断を繰り返しながら授業を進める。このように授業中の教師の見取りやそれに基づく判断、そして言動は、子どもの思考や学びの深さに反映され、授業の質に大きな影響を及ぼしていく。子どもの学習への取組を促し、子どもたちが学び合い、響き合うような授業を成立させるためには、どのようなかかわりが求められるのか。私たちは「教育相談の考え方」を基盤にして、学び合いの授業を探ることにした。

「教育相談の考え方」とは、子どもが見せる言動面だけにとられず、何を感じ、どう考えているのか、なぜそのような言動をとっているのか、子ども一人一人の内面を理解し、存在価値を認め、その子どもの成長を支援し、育てていこうとする姿勢をもってかかわることであると考える。(図4)授業には様々な場面があり、それぞれに望ましい教師のかかわりがあると思われるが、どの場面においても、この考え方は教師の姿勢として基盤となる。

なぜなら、このような教師のかかわりにより、子どもは「自分の気持ちは分かってもらえている」「自分は受け止めてもらえている」という思いをもち、この積み重ねが教師に対する信頼感になり、安心感を生む。この安心感

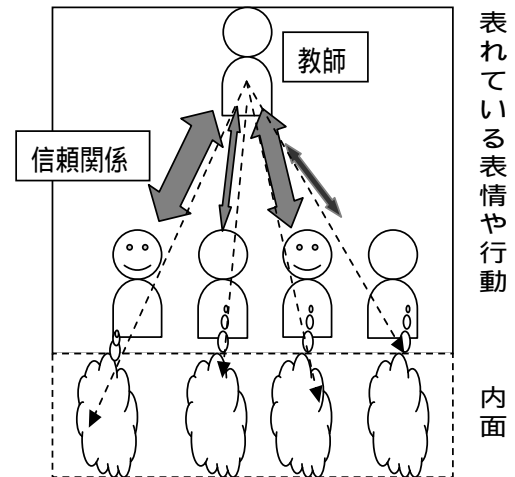


図4 教育相談の考え方

は学びの場に参加する意欲を高めていくと考えるからである。さらに学び合いの授業を目指し、子どもの間でも安心して意見が言い合える人間関係を築くために、教師は子どもたちに積極的にかつ適切にかかわることが必要である。子ども一人一人を本気で理解しようとしているか、子どもの思いからかけ離れた教師の思い込みや見落としはないか、一人一人の子どもを生かそうとしているか、などについて授業実践を通して振り返りながら研究を進めていきたい。

(2)「授業の充実を目指す」ために

学級の子どもたち全体が学び合い、響き合いが成立した授業を「充実した授業」と考えた。子どもたちが意見を出し合い、聞き合い、すり合わせるという学び合いを通して、子ども一人一人が友達や物事に対する自分自身の考え方やとらえ方、感じ方などを見つめ直す瞬間のある授業である。具体的には子どもたちに次のような姿が見られる。(図2)川崎市総合教育センター研究の総括主題にも掲げられている「自ら学ぶ」「共に学ぶ」「学び続ける」姿がここに在る。

- ・ 進んで学習に取り組もうとする
- ・ 真剣に取り組もうとしている
- ・ 自分の考えを安心して発表しようとする
- ・ 友達の考えに耳を傾けようとする
- ・ 違いを受け止めようとする
- ・ 友達の思いを汲み取ろうとする
- ・ 友達と協力して課題を解決しようとする
- ・ 自分自身を見つめ直そうとする
- ・ 学ぶことの楽しさを感じている

図2 充実した授業で見られる姿

このような授業が成立するまでには人間関係においていくつかの過程があることが予想される。(図3)学年当初は、先ず授業者と個々の子どもとの1対1関係をつくり上げる段階である。次に、教師と信頼関係が築けた子どもたちたちが集まって小

グループとしてのつながりの段階になる。そしてさらに進展し小集団が集まって学級集団として全体でのつながりの段階へとようになっていくと考える。しかし、このような段階は一つずつ順序よく進むとは限らず、その間、必要に応じて教師は一人一人の子どもとの信頼関係を常に確認しながら、行きつ戻りつするものと思われる。

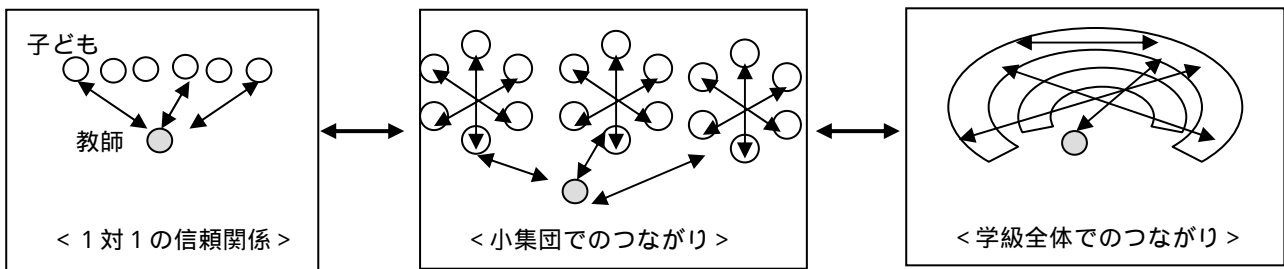


図3 人間関係の広がり

先行研究においては、学習に取り組めそうにない子どもの気持ちに教師がどう添っていくのかを探ったものとして河野¹⁾の研究があった。小集団の間でどういうグループプロセスが起こるのかに関しては尾立²⁾による研究がある。一人の子どもの学びを見つめたものに大堰・横井³⁾がいる。

本年度は小集団がどのように響き合っていくのか、そして最後の学級全体での響き合いをどのようにつくり上げるか、実践授業を通して研究を進めていくことにした。

2 研究の方法

参加観察や授業リフレクションを取り入れることで、子ども自身からかけ離れた教師の思い込みや見落としに気付く、教師の変容につなげていきたい。この「教師の変容」こそ、子どもをより深く理解しようとする姿勢が深まったということができるからである。

そこで、本研究会議では参加観察と授業リフレクションを研究の基本に据え、さらに子どもの内面を知る手立てとして、Q-U学級満足度尺度も取り入れ研究を進めていくことにした。(図5)

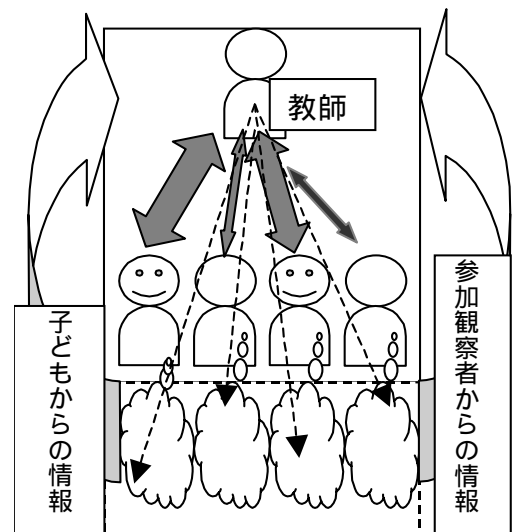


図5 教師の新たな気づきのために

(1) 子どもの学びの内面を読むために

——— 参加観察による子ども理解

教師は授業の中で、教師の顔をじっと見ている子、外を見たり、おしゃべりをしたりしている子など様々な行動をとる子どもたちを、どのように見ているのであろうか。表面的に見える状態だけで学習に真剣に取り組んでいるとか、意欲がないなどと、とらえがちになることが多いのではないだろうか。このようなとらえ方が教師自身を縛っていると思えるのである。とはいえ、限られた時間の中で授業者

¹⁾ 河野利智他「授業における教育相談のかかわり」川崎市総合教育センター研究紀要第16号 2003年

²⁾ 尾立秋彦他「学校教育相談の活性化をめざして」川崎市総合教育センター研究紀要第15号 2002年

³⁾ 大堰一雅他「学校教育相談の活性化をめざして」川崎市総合教育センター研究紀要第12号 1999年

横井孝一他「学校教育相談の活性化をめざして」川崎市総合教育センター研究紀要第14号 2001年

が一人一人の子どもの言動の意味を、子どもの内面に添って解釈するのはなかなか難しいことである。

また、教師は学習の内容の伝達に注意が注がれがちになり自分が立てた授業計画にとらわれ、その実現を最優先に考えがちである。そのため子どもの学びの過程や子どもの思いを見落とし、子どもの言動を授業者側の思いで判断し、かかわってしまうことになる。このような授業では一人一人の子どもが十分生かされているとは言えず、学び合い、互いに高め合う活動は望めない。

藤岡完治⁵⁾は、「子どもを全体として外から観察するという従来の枠組みでの「見方」をいくら鍛えたとしても、従来の子ども理解の枠を超えることは難しいのである。そこでどうしても子どもの内面に身をよせ、感じ取るといった意味での「知る」ことが必要になる。」と指摘し、「参加観察」が必要とされる根拠を述べている。

参加観察とは、「子どもは授業でどう生きているのか」を理解するためには、「子どもと一緒に生活してみるのが一番である」という考え方を基本にしている。参加観察者は子どもたちの間に入り、共に授業に参加しながら、授業者がとらえきれない子どものつぶやき、行動、視線の変化や表情、身体の動き、教師や仲間あるいは参加観察者とのかかわり、あるいはその場の印象など客観的に確認できる事実を「観察メモ」に記録していく。その「観察メモ」を基に、時間の流れに沿って子どもの視点に立って、子どもの学びの内面を読み取る作業をする。

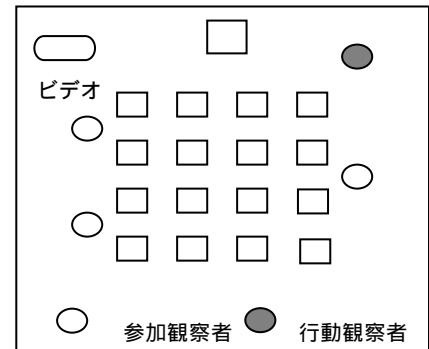


図6 参加観察の様子

参加観察者が読み取った子どもの内面は、授業者が気付かなかった子どもの行動や感じ取れなかった子どもの思いを表出する。参加観察者からの情報は「子どもが今この経験をどのように意味付けているのか」を再構成することになり、子どもが様々な思いを抱いて授業時間を過ごしていることを教師に気付かせてくれる。

(2) 教師の新たな気づきのために 授業リフレクション・授業アセスメントを通して⁵⁾

教師は自分が立てた授業計画に添いながらも、目の前の子どもの言動や表情や全体の雰囲気などから子どもの学びの状況を読み取り判断し、立ち止まったり軌道修正したりして、授業を進めている。このように教師はその時々で自分だけで振り返りを行い、そこでの気づき、解釈、判断が子どもへの対応として表れてくる。また授業の記録を再生しながら参加観察者を交えて、授業中自分は何をどう見て、どう判断し、どう行動したか、その時の自分の解釈や、感情は子どもの気持ちに寄り添っていたのかなど、教師の内面過程に焦点を当てた研究方法 授業リフレクション - は重要となる。

参加観察や授業リフレクションなど様々な視点からの情報を基に、次の授業デザインや新たな単元構想を考えるのが授業アセスメントである。これを積み重ねていくことで、これまでと違った授業への取組や子どものとらえ方があるということへの気づきが生まれる。教師の変容が、ここに見られる。

(3) 子どもの内面理解と学級の状態の把握のために Q - U学級満足度尺度を手がかりにして

教師にとって多くの子どもたちがいる学級集団で、参加観察だけでは全ての子どもの思いを読み取ることは難しい。また子どもの表す言動は思いと一致していないこともある。さらに教師の子どもの思いからかけ離れた思い込みもある。子どもからの情報を得ることは子どもの内面を知る大きな手がかりとなる。そこで、子ども一人一人の状態や、学級の状態を理解する手がかりとして、より客観的

⁵⁾ 藤岡完治「関わることへの意志」

国土社 2000年

⁶⁾ 河村茂雄「学級経営コンサルテーション・ガイド」

図書文化 2000年

で多面的な資料を提供することを目指して作成された「Q - U学級満足度尺度」(河村 2000)⁶⁾を取り入れることにした。

「Q - U学級満足度尺度」では、子ども一人一人が自分は教師や友達から認められていると感じているか、一人の人間として大事にされていると感じているかなど、「いごちのいいクラスにするためのアンケート」を基に、一人一人の子どもの内面をプロット化(座標に表記)する。そのプロット化されたもの(図8)と担任からの情報とを合わせながら、クラスにおける一人一人の居心地だけでなく学級集団の状態も理解し、具体的な行動レベルでの解決法を考え検討していくものである。

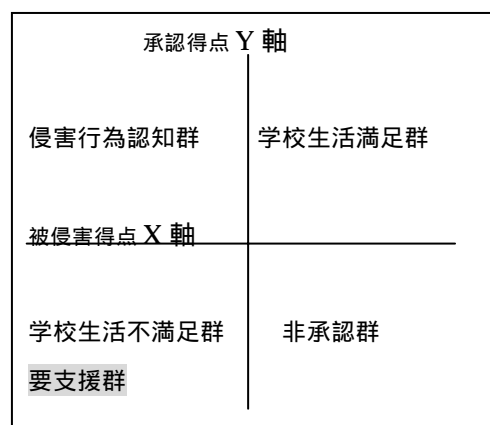


図8 Q - U学級満足度尺度

3 研究の実践

(1) 実践授業

- ・実施対象 川崎市立A中学校 第2学年 37名(9月から36名)
- ・授業者 研修員である担任
- ・参加観察者 長期研修員・研修員3名、指導主事 計4名
教室内に自由に位置し、できるだけ生徒の目線で観察する
- ・授業日時

第1回実践授業	5月20日	国語
第2回実践授業	9月26日	国語
第3回実践授業	10月31日	国語
第4回実践授業	12月15日	国語
- ・Q - U「学級満足度尺度」実施 7月 2日

様々な生徒の思いや生徒たちのかかわりの観察を目的としたので、特定の着目生徒を決めず、参加観察者が気になった生徒について記録した。指導主事は授業者の発問や行動、全体の雰囲気を中心に記録し、参観観察者の3名は教室の左・右・後ろに位置し、参加観察者が気になった生徒の行動や表情などその生徒の様子から授業の中で何が起きているのか、できるだけその生徒の気持ちに寄り添って見ることにした。また授業リフレクション・授業アセスメントをすることで、授業者と生徒の思いとの間にずれはないか、生徒たちの人間関係はどうか、また教師の生徒理解に立ったかかわりや、生徒間の人間関係を深めるにはどのようなかかわりが必要なのかなどを探っていくことにした。

(2) 授業の振り返り

第1回実践授業(5月20日) 国語(編集の工夫についてイメージを広げる活動を通して、相手を意識した言語活動を考える姿勢を育てる)

クラス替えがあり、2年生となって間もなく、2ヶ月目を迎える。担任である授業者は一人一人の生徒との信頼関係を築くことに心を配っている。授業の中でも生徒の思いに寄り添い、互いに気持ちをかみ合わせていこうとする作業を丹念に繰り返している時期である。

授業者と生徒のかかわりが見えた

ノートに書き始めたAさん

【場面】

授業が始まって机に突っ伏しているAさんに、授業者は声をかけながら紙を手渡した。授業者の質問にAさんは答えている。その後Aさんはその紙に名前と黒板に書いてあることをていねいにゆっくりと書き写した。グループ活動でも隣の男子の声かけに答えている。授業者は時々Aさんに声をかけていて、やりとりをしている。その後Aさんは参加観察者に話しかけ、二人でしばらく話し込む。

【授業者のかかわり】

授業者は当初から学習に集中できないAさんのことが気になっていた。学習に取り組みたいという気持ちは、ある子ととらえている。Aさんには部活動のことで相談にのったり、保護者と話し合ったり、他機関との連携をとったりと、これまでも個別にかかわるなどしてきたが、目立った変化は表れておらず、なかなか学校生活に集中できない様子である。徐々に皆と一緒に学習に取り組みめない場面も出始めていて、その事を本人は気にしていると授業者は見ている。

授業者は、そういうAさんの気持ちを理解し寄り添おうと、できるだけ穏やかな声で「どうしたの」とか「Aさんそれではこれをしましょう・・・」と言葉をかけて、学習に必要な紙を渡したり、時々傍に行って話し相手になったり、先を促したりしている。授業者は常に笑顔を絶やさず、Aさんとのやりとりを楽しんでいるかのようにさえ見える。

【参加観察者から見た子どもの思い】

最初のうちAさんは、学習に取り組まないように見えた。しかし授業者に「Aさんノートないの？この間休んだかな。名前書いてごらん。」と言われ、書き始めた。無理なく素直な気持ちで授業者に応じている様子が伝わってくる。隣の男子とも落ち着いて話している様子である。Aさんが真剣に書いている姿からていねいにきちんと書きたいという気持ちを感じられる。その後、参加観察者に自分の悩みを話し始めたAさん、その内容も話し方も真面目で、真剣に考え悩んでいる様子が伝わってきた。

【授業リフレクション・授業アセスメントから気付いたこと】

Aさんの気持ちに寄り添ったと思われる授業者のかかわりが随所に見られた。学習に取り組まないのではという心配から声をかけたことが、学習に取り組むきっかけになっていたように思えた。また、ノートでないと書かないかもしれないと思ったが、とにかく紙を渡してみようという思いからかけた言葉がAさんの行動を促し、意欲につながったように思えた。このようなかかわりができたのは、いつも話をじっくり聞くなど、常日頃から肯定的な関心をもち、Aさんのことをよく分かってきたからこそといえよう。この積み重ねがAさんと担任との強い信頼関係を築き、そのやりとりが周りの生徒にも影響し、隣の席の男子もAさんに話しかけたのではないかとと思われる。授業者や友達とのやりとりを経てAさんは、参加観察者にも話しかけてきた。

生徒たちの人間関係が見えた

Bさんの隠した涙

【場面】

グループで話し合った内容を発表する場面で、Bさんが発表した。ある男子生徒が「聞こえませんか」と二度言った。するとクラスのほとんどの生徒が笑った。Bさんは、大きな声で言い直した。しかし着席後、筆箱をいじったり、足をゆすったりと落ち着かない様子を見せ、目のあたりを手でぬぐって

た。感想も簡単に書き、授業後も下を向いていたが、他のクラスの友達に呼ばれ、教室を出て行く時にドアを蹴飛ばした。

【授業者のかかわり】

Bさんは担任の手伝いをよくし、学習にも真剣に取り組み、几帳面で真面目な性格の持ち主だと授業者は見ている。また男子とは比較的気軽に話せるが、女子には話しかけられないところがあり、女子との友人関係では苦手意識をもっているかもしれないととらえている。

本時は授業者は、グループ活動の授業を設定した。そこでは心配ないと思い、特別にBさんとは、かかわってはいない。発表の場面では、Bさんなら答えてくれると思い、目で発表することを促した。

【参加観察者から見た子どもの思い】

Bさんは積極的にグループの人に話しかけている様子が見られない。気持ちを抑え、淡々と活動しているように見える。Bさんは発表をする気はない様子だったが、担任と目が合い「発表してみないか」と言われているように感じた様で、ちょっと嫌だなと思いながら発表した様子であった。声が小さかったことを指摘され、みんなに笑われた後、すぐに大きな声で言い直したが、指摘した男子生徒にクラスみんなが同調して一緒に笑われたことに深く傷ついた様子であった。それを紛らわすために筆箱をいじったり、足をゆすったりして、悔しさをこらえている様子が伝わってきた。みんなに絶対涙を悟られないようにしていたBさんの様子から「みんな大嫌い」と心を閉ざすのが伝わってきた。ドアを蹴飛ばしたことからその怒りが伝わってきた。感想にも疎外感を感じていたBさんの思いが書かれていた。参加観察者にも、それまでは学級全体が温かい感じだっただけに、ことさらその笑いがクラス全体の雰囲気冷たくしたと感じた。

【授業リフレクション・授業アセスメントから気付いたこと】

授業者はBさんがいつも学習に真面目に取り組んできているので、簡単に発表してくれると思った。あの時の笑いは、「聞こえない」と言った男子に対するもので、Bさんに対してだとは思いつかなかった。辛い思いをしていたことや、涙していたことにも全く気付かなかったと振り返っている。Bさんと授業者に信頼関係が築かれているのは、発表の様子からも分かる。しかし授業では何が起こるか分からない。授業者は一人一人の生徒がクラスの中でどう思われているかに気を配り、またグループ活動に不安をもっている生徒もいることへの配慮が必要でもあることにも気付いた。

Q - U学級満足度尺度を実施（7月2日）

普段私たちは、生徒たちが、どのような思いで学校生活を送っているのか、生徒との会話や行動・表情などから理解しようとしてきた。今回「Q - U学級満足度尺度」アンケートを実施してみると、生徒たちがクラスの中でどんな気持ちでいるのか、これまでに気付かなかった面が見えてきた。

【Q - U学級満足度尺度を実施して気付いたこと】

- ・ 「学校生活満足群」の生徒は普段から積極的に物事にかかわっていると思われる生徒たちであった。
- ・ 担任が感じている以上に皆から認められていないと答えた生徒が多かった。また友人関係においてトラブルは少ないものの、居心地の悪い思いを感じていると答えた生徒もいることが分かった。
- ・ 友達と気軽に話したり活動したりすることに抵抗があり、生徒たちが自分の気持ちを表現しづらく、学級全体で協力して一つのことをやり遂げようとする意欲も弱い傾向が見られる。
- ・ いつも明るく振舞っている生徒の中には学校生活を楽しめないと感じていると答えた生徒もいたが、担任にはそう思えなかった。生徒の表面的に見せている言動と違いがあることに気付かされた。

- ・ 友人関係がやや固定化して、生徒たちの人間関係がうまくつくりだされていないように思われる。
- ・ 「友人との付き合いは自分の成長にとって大切だと思う」と答えるなど、友人関係の面で望ましい感情をもっている生徒が多かった。
- ・ 担任と生徒一人一人は信頼関係が築かれている。

【学級・生徒アセスメント】

- ・ 生徒たちのよりよい人間関係をつくり上げていくために、例えば、構成的グループエンカウンター、グループ活動、ゲームなど、楽しい雰囲気の中で自分の個性や自己を表現でき、友達とのかかわりを深められるような活動を取り上げていく。
- ・ 居心地の悪い思いをしていると答えた生徒や学校生活に不満を抱いていると答えた生徒には早めに個別に、話が聞ける機会を継続的にもつことが大切だと思われる。生徒の悩みを受け止め、生徒とのかかわりを増やし、何が支援につながるのかを生徒と共に考えていくことを担任一人ではなく、学年、学校の教職員がチームで応援していく。
- ・ 担任と生徒一人一人とのかかわりはよいので、このまま続けていく。

【担任がとったかかわり】

- ・ 一人一人の言動や表情が気になり、これまで以上に生徒一人一人を細かく見るようになった。
- ・ 二者面談を実施し、どの生徒にも話しかけるようにした。特に不満をもっている生徒には、担任と二人になる状況を意図的につくりながら、悩みや不満はないか丁寧に話しかけ、相談にのり、対応した。侵害行為認知群にいたると思わなかったKさんの悩みが分かり、解決することができた。
- ・ 生徒たちは学校だけでなくその他の場面での悩みも抱えていたりして、休み時間や昼食時間、部活動や放課後などを使ってのかかわりも増えた。
- ・ 友達とのかかわりを深めるために「互いのよさを認め合い、それを伝え合う」ことをねらいとした「Xさんからの手紙」⁷⁾を実施した。生徒たちは自分宛の手紙を真剣に読み嬉しそうであった。
- ・ 夏休み中に転校していく仲間を励まし、仲間と遊ぶ心地よさを体験して欲しいと願い、お別れ会でゲームを取り入れた。どの生徒も無邪気にゲームを楽しんだ。

2学期の教育実習生とのお別れ会では、「今度もゲームは当然するんだよね」と担任が思ってもいなかった発言が生徒からあり、急ぎょゲームをした。仲間とゲームをすることの楽しさを感じてきていることが分かる。担任が生徒たちの人間関係を深めることを意識し、教科の時間だけでなく、その他の時間でも意図的に仲間作りや教師とのかかわりの場を設定してきたことが効果を上げてきている。

第2回実践授業（9月26日） 国語（物語の前半部分を音読し合い、主人公の心情を考える。） 教育相談（友達の意見に共感し、グループでの活動がかかわりの きっかけとなり、相互の理解が深まる。）

9月の席替えは、生徒たちから「勉強がしやすいように、先生が決めて欲しい」という要望があり、授業者がグループを意図的につくった。学習への意欲は1学期より少し高まった感じがある。男子も班長に立候補するなどクラスの状態に少し変化が見られる。仲間とのかかわりが増えたことで生徒たちは小集団での活動の有効性に気付いてきていると感じられ、小集団活動を取り入れた授業が展開できると思われた。さらに1学期の実践授業を生かして、不安を抱いている生徒が安心でき活動しやすくなるように、人間関係がとりづらいついて感じている様子の生徒とその生徒が比較的話しやすいついて思っ

⁷⁾ 河村茂雄 『グループ体験によるタイプ別学級育成プログラム』

ている生徒を、同じグループにするなど配慮した。さらに授業計画の中に教育相談の視点を新たに付け加えていて、生徒たちのかかわりを意識して授業を進めたいという授業者の思いが感じられた。

話し合いが進み楽しそうなグループ

【場面】

グループ内で音読をする場面であった。Bさんは机をそのままにしながら、Dさんに話しかけている。Dさんが全員に話しかけ音読の役割を決めている。Bさんも相槌をうったり、自分の意見を言ったりしている。その他の生徒も役割が決まるたびにメモしている。Bさんは友達の筆箱を触ったり話しかけたりして、笑顔も見られる。音読はスムーズに進む。みんな積極的に話す。Bさんは参加観察者にも時々話してきて、授業の終わり頃には「面白いグループでしょ」と笑顔で話しかけてきた。

【授業者のかかわり】

1 学期、涙を見せたBさん。友人関係で悩んでいることはQ - U学級満足度尺度からも分かった。そこでBさんが比較的話しやすいているDさん、Eさん、誰に対しても優しく接する男子生徒3人の計6人にする事で、Bさんがグループに入りやすいようにした。授業者は何度かBさんの様子を見に来るなど、気にかけていた。授業者は、Bさん以外のグループも回りながら、それぞれの生徒に声をかけたり、笑顔を見せたりしていた。

【参加観察者から見えた子どもの思い】

友達に笑顔で話しかけたり、ふざけ合ったりしているBさん。伸び伸びと自己表現でき開放的になっているように見えた。友達とのかかわりが楽しくて仕方がない様子で、その溢れ出る感情を参加観察者にも表していた。Bさんは司会者の言葉に直ぐに答えるなど、グループ内で自分が受け入れられていると感じているようで、まとめでも進んで意見を出して、楽しそうな様子に見えた。

【授業リフレクション・授業アセスメントから気付いたこと】

Bさんは伸び伸びしている様子で、男子とも話すことができ、楽しそうに見えた、と授業者は振り返っている。「昼食が楽しく食べられるメンバー」を基盤にしてグループ編成を考えた。互いにあまり親密でない時期では、気のおけるメンバーの方が活動しやすく、その中で達成感や自己効力感を味わうことが自信につながり、次の新しい関係にも積極的になれるのではと考える。話しやすいか、班長に協力してくれそうであるなど生徒たちの人間関係を中心にグループ編成したことの効果が出ている。安心できる雰囲気、読みの分担でも譲り合っただけの決定になり、まとめでの意見も自分が受け入れられていると感じているから出せた。人間関係のよさはグループ活動を活発にするし、居心地のよさから生まれた自信は、新しい人間関係をつくろうとするエネルギーにもなっているのだと思われる。

なかなか話し合いが進まないグループ

初めて班長に立候補したFさん。学習態度も真面目で、コツコツ努力するタイプであるが、これまでは必ずしも積極的ではなかったが、授業者はこの学期は少し違ってきている生徒ととらえている。学校生活に集中できない様子のAさん。気のやさしい女子生徒、リーダー性のある男子生徒のGさんなど6人のグループである。

【場面】

話し合いが進まないように感じた授業者は、Fさんに進め方のアドバイスをした。その後Fさんがみんなに声をかけ、役割を決めていこうと動き始めた。Gさんが一緒に声をかけ、Fさんを支えている。その後も、授業者は様子を見ながら進め方をアドバイスしている。他のグループからは遅れたが、FさんとGさんはみんなの役割を決めることができ、全員参加してグループ内での音読もできた。

【授業者のかかわり】

授業者は、初めての班長でFさんが、話し合いを進めるのに苦労するのではないかと気になっていた。他のグループよりは頻りに様子を見に来て、その都度アドバイスをしている。「どんな分け方をするのか」「どうやって役割を決めるのか」など小さな声で話しかけている。また授業者はAさんと話したり、先を促したりしてかかわりながら、学習に取り組むきっかけをつくっているように見えた。

【参加観察者から見た子どもの思い】

下を向いたり、絵を描いたりしている仲間を目の前にして、何かしなければと思いながらも、どう切り出したらよいのか困っているように見えるFさん。そんな時、授業者が適切なアドバイスをしてくれるので、Fさんは進め方が分かりほっとしたように見えた。Fさんは徐々に、みんなに話しかけるようになった。Gさんも協力的なのがFさんにとっては心強く感じているようであった。Fさんは、俯いているAさんに何と声をかけてよいか戸惑っていた。授業者とのやりとりから、Aさんにはやる気があることが分かり、Fさんは役割を決め、それをAさんに伝える。Aさんもすんなり引き受けたことで、Fさんに自信がついたように思われた。

【授業リフレクション・授業アセスメントから気付いたこと】

話し合いが進まないグループには、授業者が進め方をアドバイスすることにより、全員に今後の方向が分かり、班長も話し合いを進めやすくなる。授業者が、Fさんを心配し細やかに対応したことと友達の協力が、Fさんの自信につながったのだと思われる。また、このグループのペースに合わせ、先を急がせなかったと授業者は振り返っている。この柔らかなかかわり方がグループ内の雰囲気をつまやかたように見えた。

学習への取組が十分でないように見えた生徒は、何をしたらよいのか分からなかったからのように見え、グループ活動では役割分担が大切だと思われた。また授業者とAさんとのやりとりが、他のメンバーとの橋渡しになっていて、周りの生徒はAさんに声がかけやすくなっていたように思われる。

第3回実践授業（10月31日） 国語

教科・・・俳句に親しみ、俳句の基本的な決まりを理解し、鑑賞する。

相談・・・新しいグループの中で学習を行う意義を感じながら、グループでの意志決定を行う。

合唱コンクールでの取組では数度の話し合い後、最後には涙ながらに全生徒がそれぞれの思いを出し合い、「最優秀ではなく、みんなの心を合わせて歌う」ことを確認した。練習は自主的に行い、特別活動（校内研究授業）で「組にとっての合唱コンクールを考える」という授業も行った。生徒たちは「何か世界が変わった気がする。」「すごい、よい意見が出てよかった。いい話し合いだった。」と振り返っている。先生やみんなの前で堂々と意見が言えたという感激が感じられた。生徒たちの人間関係を意識した取組をしてきての3回目の実践授業になる。朝、席替えを行っている。

みんなうれしそう

伸びやかなグループ活動

【場面】

グループごとに課題に取り組む場面であった。授業者は「司会者は班長、発表者は班長の向かい、記録係は班長の左隣」と指示をする。どのグループも班長を中心に話し合いが始まる。笑い声あり、授業者を呼ぶ声あり教室は、にぎやかである。特にアドバイスを求める声が多く、授業者はどのグループにも対応している。生徒は熱心に話し合いをし、中には意見がまとまる度に拍手が起こるグループもある。Fさんのグループである。Fさんが中心に進め、笑い声も聞こえる。また途切れながらも話し合いを進めているグループがある。「2人だけで話さないで、俺ら3人も入れろよ。」「俺はこう思うけど、お前は?」「ねえ早くまとめようよ。」と話し合いを進めようとしている。また授業者はAさんのところで話を聞いている。その間にも授業者を呼ぶ声があがり、授業者は忙しく動き回っている。

【授業者のかかわり】

今朝の席替えに先立って「Dさんと一緒にグループにしてくれた方がいいのですが。」とのAさんの要望には、まだ配慮が必要と考えDさんと同グループにした。席替えで不平が多く出たので、1校時「サバイバル」というエクササイズを行った。その中で集団の意志決定について生徒たちにアドバイスをした。「勝敗はあまり問題にならない。多数決で決めるのではなく、なるべく自分たちの意見をすり合わせるような形でみんなが納得いくようなものを目指して欲しい。だから、みんな、ちゃんと意見を言って一つにしぼってください。」ということを確認しながら進めた。

本時での授業者のかかわりも細やかで、どのグループにも何度もかかわり、あちこちから授業者を呼ぶ声もあがり、各グループを回りながら対応している。前回での実践授業が生きている。

【参加観察者から見た子どもの思い】

次々と授業者を呼び一見騒がしかったが、その雰囲気にはうれしさがあふれ、ほほえましいものであった。生徒が安心して授業者と相談し、それを誰からも非難されることがない関係になっている。生徒たちは、授業者が自分たちの問いにきちんと答えてくれるという心地よさを感じていて、自分の気持ちを素直に表現しているように思われる。生徒たちは、授業者と打ち解けていて、触れ合いを楽しんでいるように見えた。

生徒たちは互いに構えがなくなっている。みんなの前で間違いや失敗を恐れなくなっていて、自分の言ったことで攻撃されないという安心感が生まれてきているように感じる。グループ活動のよさも感じてきていて、互いに意見を出し合いみんなが納得できる答えを出そうとしていた。

【授業リフレクション・授業アセスメントから気付いたこと】

席替えでは、Bさんの希望通りにした。Bさんは、友人関係や部活動での人間関係でも悩んでいることから、今回も配慮が必要と授業者は判断した。Bさんは安心した様子で、学習に取り組んでいるように思われた。また席替えをした後、集団の意志決定を目的とした活動をしたことが、クラス内の人間関係を築いていくのにつながっていたようである。

授業者は、「本時は、グループ内の雰囲気はとてもスムーズに感じた。生徒たち自ら動き今までの授業の中で一番楽しかった。」と振り返っている。考えた方が面白いと思われる質問には、調べ方や考え方などをアドバイスし、グループで取り組んでいくのを授業者が見守ることが、小集団の学びを育てるのに大切であると思われる。グループ内での役割(司会者、記録者、発表者)は輪番制にして誰もが経験できるようにしてきている。このことも小集団の学び合いを支える大切な一つであると思われる。

本時は参加観察者にも、生徒たちの横のつながりが感じられた。他教科の担当者からもグループ活動がスムーズに行われるようになってきていると言われたことがあり、生徒たちの人間関係を深めようと取り組んできた成果が徐々に表れてきているように思われる。授業者は、昨年度までは学級活動の中でグループ活動に取り組み、クラスの組織をつくってきたが、本年度は授業の中でグループ活動を積極的に取り入れた結果、学級活動や道徳でも話し合いが円滑に進むようになり驚いていると、これまでを振り返っている。グループ活動を何度も経験する中で生徒たちの相互理解が深まり、クラス内の人間関係でドキドキしたり、困ったりするなどの心配事がなくなっているように思われる。グループ内の人間関係で相手への構えがなくなるのは、学び合いを成立させる大事な要素と思われる。

学習に取り組めない様子を見せているAさんに授業者は、細やかに声をかけている。Aさんの気持ちを聞き、時折冗談に付き合いながら授業への取組を促していることが、Aさんにもその周りの生徒にも学習に取り組みやすい雰囲気をつくったように思われる。

自信にあふれた顔

みんなそろって「はい！」

【場面】

グループ内で課題に沿って話し合った後、その答え合わせをしようとしたら自然に手が挙がってきた。全員が手を挙げているグループ、男子が3人揃って手を挙げているグループ、女子3人揃って手を挙げているグループ、まっすぐに手を挙げている生徒、手を何度も振っている生徒などにぎやかに手が挙がる。間違えると「エー」とか笑いが起こるが、嘲笑ではなく温かい。すぐに手が挙がる。

【授業者のかかわり】

授業者は多数の生徒を指名している。正解を板書しながら説明し、全員で確認している。授業者は、「当たらないかもしれないなあ。難しいから。当たなくても仕方ないよ。難しいから。」と言ったり、冗談で対応し笑いを誘ったりしている。

【参加観察者から見た子どもの思い】

大きな声で「はい」と言いながら手を挙げている生徒たちの顔は自信にあふれていて、楽しそうに見える。まっすぐな手の挙げ方から、自分たちで考えたという満足感のようなものが感じられる。「当てて欲しい。自分たちの考えを聞いて欲しい」という意気込みのようなものが感じられる時間であった。生徒の中に間違いを恐れ尻込みするような様子は感じられない。授業者の冗談や友達の勘違いをみんなで笑いながらクラスの雰囲気を一層和やかにしているように思われる。生徒たちは、間違いと分かるとすぐに正解を見つけようと相談している姿が見られた。

【授業リフレクション・授業アセスメントから気付いたこと】

授業者は、生徒から自然に手が挙がり、普段手を挙げていない生徒も見受けられたので、多くの生徒の発言を基にしながら授業を進めることにしたと振り返っている。グループの決定であり、間違いを個人で背負うこともないという気持ちも、生徒の中にあつたのではないかと考えられる。今回の課題は個人で取り組む内容であったが、グループ活動にし、苦手な生徒が得意な生徒と話す中で理解できるようになったり、考えを提案した生徒は皆に支持され自信を深めたりというような場面が見られた。

間違えてもプライドが傷つくという雰囲気が感じられない。授業者は、「正しい答えを言うよりもいろいろ答えが出てきた中で授業が進むほうが楽しいと思っている」という姿勢で授業を進めてきている。生徒たちの言葉を善意に受け取り、生徒の失敗を失敗ととらない授業者の授業への姿勢が生徒

に理解され、学級全体に伝わり、自分の言ったことが攻撃されず安心して言い合える関係をつくってきているように思われる。この関係は学び合いの基礎となる関係だと思われる。小集団にとどまらず学級全体での学び合いがつけられつつあるのを感じた場面であった。

第4回実践授業（12月15日） 国語（描写されていない父の様子と、その姿を見た私の気持ちを考える。）

初めて班長に立候補した生徒の中に一学期涙を隠したBさんもいた。席替えでは、Bさんは今回は短いので、くじで決めることに了承した。BさんはDさんと離れたが、その状況を受け入れていた。生徒たちは、1月の百人一首大会に向けて早く登校し、グループ対抗をベースに練習をしている。今回はグループ活動にこだわらず、学級全体で学び合うような授業を目指したいと思った。

なにか物足りなさそうな生徒たち

【教師のかかわりを含めた全体の様子】

授業者は、本時のねらいを話し「妹が帰ってきた時の家族の状況」を質問形式で一つ一つ確認していった。その時々数人の生徒たちが答える。「私と弟はかぼちゃを全部収穫し一列に並べた」という事実を確認した後、「どうして、したんですか」「妹を喜ばせるため」「どうして喜ぶの」と授業者は質問をしていく。妹が寝ている絵を黒板に描き、「生を並べておいしいかな」と生徒たちに語りかけた後「一列に並べる行動をなぜしたのか」と質問した。「何かしたい」「妹のために何かをせすには無理」と答える生徒。「そうだね」と授業者は、板書をした。

【参加観察者から見た子どもの思い】

「読んでくれる人は」の問いかけに数人の生徒が手を挙げた。見ている生徒も違和感がない様子でいつもの光景のように見えた。発問には誰からともなく答えが飛び出し、それを受けて展開する。学習意欲がないわけではないが、生徒たちの雰囲気はやや物足りなさそうに感じられた。また、発問が次々と発せられ、授業者が自分の答えに誘導しているようにも思えた。

【授業リフレクション・授業アセスメントから気付いたこと】

生徒たちは、同じ文学教材を味わい、そこで感じた感動を共有したいと思っていたように感じられた。参加観察者も教材の内容に感銘を受け、立ち止まって考えていたいと思った。生徒たちの事が気にならなくなっていたのは生徒間の人間関係が築かれてきているから、といえるのではないかと感じた。生徒たちが人間関係で心配事がなくなった時、生徒の関心は学習に向かい、学習に集中していき、共に学び合おうと意見の交流が起こり、授業に広がりや深まりが生まれるのではないかと感じた。

一学期は、生徒たちの関係は薄く、友達に話しかけられないなどグループ活動が停滞しているように見えたが、安心した人間関係の中で学び合いの授業を求めるまでに成長していたのが感じられた授業だった。

研究のまとめ

1 研究から見えてきたこと

人間関係が促進することに視点を当て、授業の充実を目指してきて見えてきたことがある。

（1）子どもや授業に対する教師の姿勢が子どもへのかかわりに表れ、授業に影響を及ぼしている。

様々な問題を抱え、ともすると学習意欲が減退しそうになるAさんの事例に見られたように、一人一人の子どもを肯定的に理解しようとする教師の姿勢は、温かで柔らかな子どもたちへのかかわりとなって表れ、子ども自ら学習へ取り組みようとするきっかけとなった。子どもの気持ちに寄り添ったかかわりは、一人一人の子どもが生きている環境や背景を知り、それがその子どもにとって、どのような重みになっているのか、子どもの言動がどのような思いの表われなのかを考えようとする教師の姿勢から生まれてくる。また生徒が様々な意見を出し合うことで、授業が面白くなるという授業者の考えが、生徒たちに伝わり、安心して意見が出せていた。何でも言い合える雰囲気の中で、さらに自分らしい考えを出そうと、想像を膨らませている生徒たちの姿が見られた。このように授業に対する教師の姿勢が授業の質に大きく反映されていることが分かった。

(2) 子どもたちの人間関係は授業の質に反映する。

子どもたちが理解し合い、安心した関係に在る時、互いに考えを出し合うことで自分とは違った考えに出会い、そこに交流が生まれ、その交流は授業に広がりや深まりを生み出す。違った考えに出会った時の何か複雑な気持ちや自分の考えが認められたときの満足感、友達とすり合わせながらまとめ上げたときの達成感などを味わった子どもたちは、集団で活動することの楽しさや有効性に気付き進んで学習に取り組むようになった。ここには共に学ぶことの意義を見いだしている子どもの姿が在る。

(3) 子どもたちの人間関係を促進するには教師の積極的なかかわりが必要である。

授業の中に積極的にグループ活動を取り入れたり、構成的グループエンカウンターを実施したりするなど、一年間授業者が意図的に仲間作りに取り組んできたことで、生徒たちはクラス内の人間関係での不安感が減り、誰とでも話し合えるようになってきていた。Bさんが12月には班長に立候補し、メンバーはくじ引きという偶然性に任せられるまでに成長していたことから分かる。

しかしグループ活動では、目の前の子どもたちの人間関係に合わせて、時間やグループの構成、内容を考慮して計画し実施していくことが大切である。集団活動で気がかりな子どもがいる場合には、その子どもが集団活動に取り組めるようにさらに細やかな配慮が必要になってくる。

(4) 教師の新たな気付きは新たなかかわりを生む。(参加観察とQ-U学級満足度尺度の意義)

参加観察者によってBさんの涙に気付いた授業者は、その後、席替えの度にBさんに配慮するようになった。その結果Bさんは徐々に友達とのやりとりを楽しめるようになつた。またグループ活動で下を向いていた生徒たちは、やる事が見つからなかったのではないかという参加観察者からの見取りは、授業者がグループ活動の仕方を考えるきっかけとなった。子どもからかけ離れた教師の思い込みや見落としに気付くことは、一人一人の子どもをより深く理解しようとする教師の姿勢につながっていく様子が見られた。

さらにアンケートという形で子どもからの情報は、これまで教師が気付かなかった一人一人の子どもの思いや学級の状態に気付かせてくれた。気付いたことで「もっと居心地のいい場所に・・・」「もっといい人間関係に・・・」という教師の思いになり、そのためにはどのような取組や、かかわりがよいのかという教師の工夫につながっていくことが実感された。

2 今後の課題

今後の課題として、以下のことが挙げられる。

参加観察は教師に新たな気付きをもたらした。しかし、本研究会議で行っているような形で学校において日常的に実施するには、工夫が必要と思われる。例えば学年内等、参加可能な人数

で実施するという方法も考えられる。一人の参加観察者であっても、そこからの情報は必ずや授業者に新たな気づきをもたらし、子どもの新たな面を知り、新しいかかわりが生まれてくると思われる。また場合によっては、意図しない場面の中で子どもたちが、参加観察者の役割を担っていることもある。これを取り上げることによって同じような気づきを得る方法も考えられる。この研究の成果を日常の授業場面で、どう生かしていけるようにするかを検討していくこと。

Q - U学級満足度尺度は一人一人の子どもの教室内の居心地や学級集団の状態を把握するのに有効であったが、その分析やアセスメントの仕方、さらにその結果の有効な活用を考えていくこと。

学級内で、ほどよい人間関係が築かれてくる過程を通して、子どもが授業の中で安心して言い合い、聞き合おうとする様子が感じられた。このような授業の中で一人一人の子どもが、何をどう考え何を求めているのか、教師が知る手がかりはないかを探っていくこと。

最後に、研究をすすめるにあたり適切なお助言をいただきました先生方、研究にご支援、ご助言を下さいました学校教職員の皆様に、心より感謝し厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

佐伯胖	『「学ぶ」ということの意味』	岩波書店	1995年
近藤邦夫	『子どもと教師のもつれ』	岩波書店	1995年
佐藤学・稲垣忠彦	『授業研究入門』	岩波書店	1996年
藤岡完治他	『成長する教師 教師学への誘い』	金子書房	1998年
國分康孝他	『授業に生かす育てるカウンリング』	図書文化	1998年
藤岡完治他	『教育相談的視点による授業研究』	横浜国立大学教育人間科学部附属教育実践研究指導センター	1998年
藤岡完治	『関わることへの意志』	国土社	2000年
大瀬敏明	『学校を創る 茅ヶ崎市立浜之郷小学校の誕生と実践』	小学館	2000年
河村茂雄	『学級崩壊 予防・回復マニュアル』	図書文化	2000年
河村茂雄	『教師のためのソーシャルスキル』	誠信書房	2002年

【指導助言者】

日本女子大学教授	(川崎市総合教育センター教育相談センター専門員)	鷓養 美昭
東京都立大学教授	(川崎市総合教育センター専門員)	永井 徹
都留文科大学教授		河村 茂雄
横浜国立大学助教授		芳川 玲子
川崎市立小学校児童指導研究会長	(川崎市立西菅小学校長)	安谷屋 健
川崎市立中学校教育研究会生徒指導部会長	(川崎市立東橘中学校長)	前原 成文
川崎市総合教育センター研修指導主事		北西真知子